

タイにおける貝葉写本 Palm Leaf Manuscripts について

三保 忠夫*・三保サト子**

Tadao MIHO・Satoko MIHO
On the Palm Leaf Manuscripts in Thailand

[Key Words:Palm-leaf manuscripts, Bai-larn, Baiyo, Writing materials,
Corypha palm, Palmyra palm, Lanna Thai, Thailand]

Abstract

The present description is a report on writing materials in Thailand. The Thai made Palm-leaf manuscripts of Corypha palm and they called it Bai-larn. Palmyra-palm was used for manuscripts in South India, Bali and so on, too. But it was put to use as writing materials in Thailand.

[目次]

はじめに

- 1 タイの書記素材—コリファヤシ
- 2 バイ・ラーンの調製方法・作成
- 3 写本の保存機関チェン・マイ大学
- 4 パルミラヤシについて

おわりに

はじめに

南アジア、東南アジアを中心として作成された Palm Leaf Manuscripts, 即ち、中国や日本に「貝葉本」^{ばいようほん}「貝多羅葉」^{ばいたら}と称される典籍・文書の類には、おおむね、次の二種のヤシの葉が用いられたようである。

A: コリファヤシ 学名 *Corypha umbraculifera* Linn. 英名タリポットヤシ Talipot Palm 和名コリバヤシ

B: パルミラヤシ 学名 *Borassus flabellifer* Linn. 英名パルミラヤシ(パルマイラヤシとも) Palmyra Palm 和名オウギヤシ

先学によっては、この他にも二三のヤシの名を挙げられることがある。だが、いろいろな問題があるようで、

それぞれ慎重に検討していく必要がある。

また、二種のヤシの葉は、どこでも同時に並行して用いられたのではなく、地域や国によって偏っているようである。例えば、比較的近代のスリランカ、タイ、ミャンマー(ビルマ)、ラオスなどでは前者のコリファヤシが用いられ、他方、南インド、バリ島などでは後者のパルミラヤシが用いられた。

そもそも、今日、書記素材として、これらのヤシの葉を用いることは、どの地域・国においても一般的なことではない。もはや、往時におけるような書記生活は推移し、あるいは、廃れてしまい、その実態を正確に窺い知ることは不可能である。それ故のことでもあろうか、少なくとも現今では、上記のような地域による用・不用が、表面的にせよ、見てとれるようである。

私どもは、1996年8月(一次)、1997年4月(二次)、1998年5月(三次)の三度の機会を得、タイの各地における書記素材、古典籍・文書、書記生活等についての調査を行った。この過程において、私どもは、タイの歴史・文化の大いさと奥深さをあらためて認識し、大小の成果を得ることができた。以下には、その一端としてタイにおける書記用のヤシの葉 Palm Leaf、及び、その写本の若干について述べておきたい。

タイは、東南アジアの大陸中央部に位置する立憲君主国で、1932年まではシャム Siam と称した。現在、正しくは、タイ王国 Kingdom of Thailand(Prathet Thai)

*島根大学教育学部 国語科教育研究室(日本語学)

**島根県立島根女子短期大学 文学科

といい、面積51万3千km²、人口6万人、主要言語はタイ語、とされる（『世界の国一覽表1998年版』、外務省編集協力、世界の動き社編集発行、1998年4月20日初版）。住民・言語の面においては、中部のタイ族・タイ語が中心となっているようであり、これらのタイ系民族では、スリランカ系の上座部仏教が信奉されている。

タイでも、紙 Paper の普及する以前、典籍・文書類の作成にはヤシの葉が用いられた。このヤシの葉、また、その貝葉本 Palm Leaf Manuscriptsを、タイではバイ・ラーン Bai-larn という。bai は葉 leaf, larn (Tôn Larn) はコリファヤシを意味する。

アユタヤ時代 (1351~1767) に作成された歴史書・宗教書、また、タイ北部のチェンマイ Chiang Mai を中心として、13世紀末から20世紀初頭まで存続したラーンナータイ Lannathai 期における古写本類などが注目されており、こうした写本類には、ヤシの葉だけによるものもあれば、金色の塗料を塗った上に赤や黒のラッカーで文字を書いた大型本もある。

タイの貝葉本 Palm Leaf Manuscripts、即ち、バイ・ラーンについては、日本においても大小の言及があるが、その素材や製法等を実地に調査した文献として、下記を参照しなければならぬ。

○小林良生（元通産省工業技術院四国工業技術試験所勤務）著「タイ国に貝葉 "バイラーン" を求めて——タリポット椰子とコイ紙紀行——」（『百万塔』、第55号、1983年4月）

○木戸 啓執筆「バイラーン」『世界の手漉紙』、1979年11月、株式会社竹尾、18頁、図版）

この内、前者は、1982年（昭和57年）1月時におけるバイ・ラーンというヤシの木の实態・成育地についての調査、バイ・ラーンの起源、その製品、及び、コイ紙についての調査を行ったものである。この種の研究は、とかく文献だけに終始して実態を伴わず、現実と遊離した混乱を来しやすい。これはバイ・ラーンを実地に調査した報告書として貴重なものである。本稿でも、以下、必要に応じて言及する。

1 タイの書記素材—コリファヤシ

1998年5月、第三次の实地調査では、主に、上記の二種のヤシの植生、成育地、生活との関わり等について、狭い範囲ではあるが、調査した。

その結果を一口に言えば、次のようである。

1. 現在のタイにおいて、上記の二種のヤシ、即ち、(A)コリファヤシ（学名 *Corypha umbraculifera* Linn.

英名タリポットヤシ Talipot Palm) と(B)パルミラヤシ（学名 *Borassus flabellifer* Linn. 英名パルミラヤシ Palmyra Palm) とは、併存している。

2. 二種のヤシは、タイでは、次のように称呼されている（現地名）。

(A) コリファヤシ = Tôn larn (laan) トン・ラーン

(B) パルミラヤシ = Tôn taan トン・ターン、または、Tôn tarl トン・タール

Tôn トンとは、(植物の木の)幹、茎の部分を意味する言葉である。

3. 前者は、かつて書記に用いた。今日、その葉の用途は皆無に近く、よって、このヤシは無益である。

後者は、その実は食用、薬用となり、幹は建材等となって有益であるという。

4. 現在、後者もそうだが、前者コリファヤシは、自生地はもとより、植栽地は激減しており、国有林、国立公園、植物園といった形態の中でより適切な保護を加える必要がある。

タイは、日本の約1.4倍ほどの国であり、その北部、中部、南部では、気候、風土、地質、植生などに大きな相違がある。第一次、第二次の調査では、ミャンマー国境に近い北部のメー・サイ Mae Sai, チェン・ラーイ Chiang Rai, チェン・マイ Chiang Mai を訪れたが、二種のヤシについての実情は把握できなかった。第三次の調査では、まず、(A)コリファヤシ（学名 *Corypha umbraculifera* タリポットヤシ）を求めて次の土地を訪れた。

【図版A】

- (1) 東北部のコーン・ケーン県 Khon Kaen
- (2) 中部西寄りのカンチャナブリー県 Kanchanaburi
- (3) 中部東寄りのプラチン・ブリー県 Prachin Buri

- (1) コーン・ケーン県 Khon Kaen

コーン・ケーン県の県都のコーン・ケーン Khon Kaen は、バンコク Bangkok より東北へバスで449kmの地にある、計画的に開発された、比較的歴史の浅い都市である。航空機を利用すると、バンコクから35~40分ほどを要する。ウボン・ラット Ubon rat ダム、コーン・ケーン国立大学がある。2号線で170kmも北上すればメコン川 Makong (Mae Nam Khong) であり、ラオス、ヴィエン・チャン Vientiane と国境を接するノン・カーイ Nong Khai の町がある。

コーン・ケーンの市街地やその周辺には、コリファヤシは見当たらない。熱風に乾いた大地には全く無理な話である。大体、コーラート高原 Khorat plateau に占め

られた、このイサーン ʔiisǎan と呼ばれるタイ東北部は、洪水・旱魃、赤色砂岩という自然条件の厳しいところである。

そのヤシを目のあたりにするには、この市街地より、国道12号線で西へ向かった山岳地帯に入らねばならないという。そこらは、ラオスのルアン・プラバン山脈 Luang Prabang Range が南下してタイ領内に伸び広がったような地域である。あちらこちらに広大な国立公園が設けられ、自然を尊重する形で動植物が保護されている。大小の川や湖沼 Reservoir も多い。

コーン・ケーンの町から乗用車で12号線を西に向かい、更にコーン・サンKhon san で右折して201号線を北上する。時速60~100キロで、都合2時間ほど走り、プファマル Phuphamaru 国立公園に至る。公園の正門には門衛一人が詰めている。が、音なう人は皆無に近いのではなからうか。道路端や門の脇などにコリファヤシの自生種が見られる。

近くには、また、ドンラン Donglarn 国立公園(Chumpae 在)がある。門や看板もなければ門衛もない。ここにはコリファヤシの自生種(幼苗)が多く見られた。

ドンラン公園内には池沼もある。農作業を終え、その傍らで昼食後の休憩をしている子連れ夫婦に問うと、目の前の大きなコリファヤシを眺めながら、現在、このヤシやこの葉は何にも使わない、何に使うかもわからない、用途は皆無である、植える(栽培)こともしない、これらは自分で生えているだけだ、いつの間にか大きくなって野小屋を押し倒したりする、とのことであつた。

[図版B]

この辺りには、政府の手でチークTeakの植林が行われている。この林の中にもコリファヤシの自生種(幼苗)が多く生えているが、いずれは刈り取られ、成長することはないであろう。(1998,5,6調)

(2) カンチャナブリー県Kanchanaburi

バンコクより西へバスで2時間弱行った地にカンチャナブリーがある。クウェー・ヤイ川 Kwai Yai に架かるクウェイ川鉄橋で知られた町である。

森もあれば豊かな水脈もあるから、コリファヤシは随所に生えているかと推測されたが、それは過去のことになってしまったようである。タイ国政府観光庁の支庁 TAT (Saengchuto Rd. Amphoe Muang 在) で粘り強く問うてみたが、この一帯ではそのヤシを目にすることはできないという。但し、ミャンマーとの国境辺りに行けば見られるかも知れないという。

ミャンマーとの国境は、直線距離で西に50kmほどであ

る。だが、当てもなくさまようわけには行かない。灼熱の太陽を仰ぎながら途方に暮れてしまったが、しかし、窮すれば通ずるということであろうか、たまたま世話になったサムロー(人力三輪車)の Jou Putapon君(30歳)に事情を話すと、間もなく次のような情報をもたらしてくれた。

①隠居している父(70歳)が言うには、以前、この辺りでもトン・ラーン Tòn larn を植栽していた、友人の一人(故人)は、昔、この地でトン・ラーンの切り出しカッティングの仕事をしていた。

②ここから東南東20~25kmの地にタモン村(郡) Tamong (または, Thaamɔŋ)があり、親戚が住んでいる。その家にトン・ラーンの木1, 2本がある。しかし、葉の伐採はせず、その用途はない。

③現在、トン・ラーン Tòn larn が多く見られるのは、プラチンブリー Prachin Buri やカビン・ブリー Kabin Buri の村々であろう、今でも葉をカットして製品を作っているはずだ、と父が言う。(1998,5,7調)

翌日、バスターミナル前で軽食の屋台を営んでいる同君のおばさんに頼んで軽トラックを運転してもらい、Jou Putapon 君と共にタモン村 Tamong に向かう。運転席に3人も乗れば窮屈だが、小さなクーラーが付いている。くたびれたクーラーでも格段にありがたい。

バスターミナルから30分ほど走り、サトウキビなどの田畑の広がるタモン地区の一戸の農家に着く。所在地は、58/1 Tambon (村) Wangsala, Amphur (郡, ʔamphəə) Tamong, Changwat (県) Kanchanaburi であり、老婦人の名は、ブンロイ・デンカップ Mrs. Boonloy Daengklub という。大きな家屋で、一階に土間、食卓、台所、居間などがあり、これといった壁はない。二階は寝室らしい。ウサギ、アヒル、ニワトリ、犬、猫、ヒヨコ、その他、家畜の種類も数もやたらと多いのだが、これらが気ままに平和共存しているのは不思議であつた。

問題のトン・ラーン(コリファヤシ)の木は、広い敷地の裏手の一角に、二本生えていた。一本は開花・結実後のもので、もはや枯死しつつあつた。他は10年前後の若い木である。

二者は5メートルほど離れて立っていたが、前者は、葉柄の残骸のような突起2ヶ弱を留めるのみで、葉らしい葉は着いていない。高さ約20メートルほどである。地上1メートルの部分の測ると、幹周りは2メートルであつた。これが開花・結実したのは、昨々年の11月から翌年8月くらいのことらしい。その種は周りに落下し、芽を出したそれらは、もう30センチくらいにもなっている。

敷地内には、少々の庭木や雑木が生え、ワラ屑や柴などが置かれている。石の小さな祠も立っている。隣は広々としたサトウキビ畑である。

老いたブンロイ・デンカップさんの説明によると、以前、連れ合いの生きていた時分、一緒にこの一帯に沢山のトン・ラーンを植えた、その葉を伐採し、書記用のリーフを切り採って寺院に売り、また、葉を裂いて刈ったイネを括るための筋紐を作ったりした。そうした農家は他にもあった、今は、竹 Bamboo から紙を作るので、バイ・ラーンはいらぬ、トン・ラーンは全く植えない、残っている木はこれだけだ、とのことである。

一世代、二世代前ぐらゐまでのカンチャナブリー一辺における状況が窺えよう。(1998,5,7・8調)

(3) プラチン・ブリー県 Prachin Buri

プラチン・ブリー県 Prachin Buri のカビンブリー Kabin Buri は、バンコクから東へ、時刻表では普通列車で3時間半～45分ほど行ったところに位置する。翌早朝、05時54分、ホアランポーン鉄道駅発、10時35分、カビンブリー着。途中の待ち時間が長く、時刻表より50分も遅れて4時間40分も要してしまった。朝の内とはいえ、何をどうしても暑いのに閉口したが、農耕地が地平線まで広がっているのには驚かされる。この穀倉地帯を、更にそのまま行けばアランヤプラテート Aranyaprathet であり、カンボジアとの国境である。

カビンブリーの駅で下車し、ここから軽トラックを雇って304号線をナコーン・ラーチャシーマー Nakhon Ratchasima 方面に北上すると、60分で Wang Khon Daeng Village にさしかかる。

この村の国道沿いの一戸の農家を訪問してみると、折しもトン・ラーンの、しっとりとした若い白い葉が地面に広げられ、炎天の下に晒されている。[図版C] 晒すと、より白くなるのである。軒下では、今の今まで作業中であつたかのように、大小に切り刻まれた白い葉が、刃物類と共に散らばっている。

この辺りの村では、そこかしこの農家でトン・ラーンを植え、その葉バイ・ラーンを加工し、細く裂いてこれを編み、帽子を作る。良いものは一ヶ800Bahtという(1 Baht=3.6Yen)。日常的な婦人たちの仕事らしい。

葉の用途は、けっこうあるようで、窺えば、少女の昼寝している小屋の屋根も、隣家の台所の壁材もこのトン・ラーンの若葉を干したものであつた。

この村の少し手前にはタップ・ラーン Tap Larn 村があり、タップ・ラーン国立公園がある。この門前帯には壮麗なトン・ラーンの美林が広がっていた。

このカビンブリーの地は、トン・ラーンの生育地としてはよほど適しているらしい。小林博士も実地に訪問・調査されている(上記文献、11～14頁)。但し、カビンブリーについても近くのナ・テイ地区 Na Di District についても、小林博士の行程記録(キロ数、所要時間等)には誤認がありそうである。その後に道路事情が良くなったことを割り引いても、実際と合わないようである。

(1998,5,9調)

2 バイ・ラーンの調製方法・作成

トン・ラーンの葉を切り取って経本用のバイ・ラーンを作るにつき、小林博士は、その「文献(八)」、即ち、「Larn Thong Shop 出版の本」によって次のように述べられる。(原文は縦書き)

葉柄部を切り、乾燥し、扇状にした葉の肋骨部を除去する。この葉は一定の長さに切り、幅のほぼ同じもの同志をそろえる。広幅のもので約二インチあり、経本用に使用する。そのためには、一定の長さにそろえたものをしっかりと結び合せ、暗黒色の重いフレームに固定して、キルン中でスチーミングする。その後、丸一日放置する。これは葉を成熟させるためのプロセスであり、極めて重要である。十分成熟していれば、一〇〇年以上腐ることはないという。ナロン博士は防腐剤添加論を説いたが、ここにはその説明はない。筆者の推定では、文献の説明の方が正しいと思う。余談であるが、(中略)、キルンから出した後、数分間火であぶって、葉のなかに含有されている油分をあぶり出して拭い去る。この後で完全に乾燥させると、印刷用になる。必要があれば、金粉や塗料で縁取りを行なう。(10頁)

文中、ナロン博士とは、小林博士に同行されたタイ科学技術研究所の副所長であつたナロン・チョムチャロウ博士である。

事情に詳しいはずのタイ側の解説であるから尊重しなければならぬが、火で油分をあぶり出すとされる条が気にかかる。これは、鉄筆による本来の伝統的な筆刻方法には関わりないことであろう。Larn Thong Shop はバイ・ラーンを用いてビジネス・カードや招待状などの印刷を業務とする店である。この部分は、末尾にも見える“印刷用”のバイ・ラーンのためではあるまいか。

また、利用する葉につき、あるいは、葉の用い方につき、小林博士の説明には誤解を生じ易い条がある。つまり、葉柄(部)と葉(葉身、節葉部)とを混同していらつしやるかのような、次のような発言がある。

筆者は、はじめ葉というので扇形の葉の部分を使用するものと思っていたが、ナロン博士は実際は葉ではなく、葉柄(図二)から形成されるのだと強調された。(8頁)

興味あることに、この葉柄部は幅広い白い葉状のものが丁度扇を閉じたように折畳まれているのである(図三)。(12頁)

「図二」には、「バイラーンの葉柄」との解説を付してコリファヤシの頭頂部(樹冠部)の図版が、また、「図三」には、「葉状部が折畳まれている葉柄部」との解説を付して折畳み状になったヤシの葉の図版が示されている。

バイ・ラーンを得るのは、葉柄部からではない。やはり葉そのものから得る。葉柄は、タイ語で kâan (英語 petiole)、または、kâan-bai といい、葉は bai(英語 leaf) という。当然ながら区別される。

トン・ラーンの葉は、幹 tôn から伸びた葉柄の先に掌状の形で葉(節葉)が着き広がっている。掌状葉は、30~40、または、40~50の節葉から成る。成長した濃緑の葉や葉柄は極めて強剛で、加工も利用もできないので、この掌状葉が、まだ展開しない、幼い時分に、まだ短い葉柄をくっつけたまま、切り取る。この長さは3メートル余り、切断部辺の周囲は30センチ余りである。掌状葉は折り畳まれたままで、この全体の外見は、ちょうど日本の木刀のような形体をしている。これを分解して白い(おおむね卵色)柔らかな節葉を取り出し、更に各節葉からリブ(肋骨のように見える葉脈)を切り離すことによってバイ・ラーンが得られるのである。

バイ・ラーン(裂片)は、節葉の倍数(60~80~100枚)得られることになるが、部所によって裂片に長短・広狭の大小が生ずるから、皆一様の使い方はできない。

ところで、バイ・ラーンの用途は、タイでも、日々、減少しているようである。写本用はもとより、日常的な実用の場においても、これに勝る素材があふれているからである。

バイ・ラーンを扱う専門店としては、バンコクのサムセン通り Samsen Rd., 小路7のラーン・トン店 Larn Thong Shop (Laan thong) がある。かつてはバイ・ラーン(葉)を使って経典、名刺、結婚式などの特殊な挨拶状などを印刷していた(少なくとも1982年1月に小林博士が訪問された時分のこと)。今でも、干し上げたその葉(バンビ・バイ・ラーン)をリブの付いたまま、束の状態(径30~60センチ、葉の長さ68センチ×幅5センチくらい)で仕入れるが、オーダーのない限りは、ほぼ名刺や挨拶状の印刷に終始しているようである。これらは、調製後の葉を、大体、長さ(横長)17センチ前後、縦幅

5センチ余のカード型に切り、これに金色の飾り文字や飾り模様を印刷し、左端に短い金の紐を付ける。金色はバイ・ラーンの地肌によくあい、美しい上品な印刷物となる。1束300 Baht 前後だという。

陳列ケースには、バイ・ラーンの葉を裂き、これを編んで作った小型のボックス、ザル、団扇、小籠などの工芸品も並べられている。時々、バイ・ラーンの葉だけを買いに来る客もいるから、この葉は、庶民の家庭での用途も何かとあるのであろう。(1998,5,11調)

3 写本の保存機関チェン・マイ大学

バンコクやタイ各地の国立博物館、国立図書館、大学・研究所、その他、大小の機関においてバイ・ラーンの典籍・文書が保存されているが、次にはチェン・マイ大学の場合について述べておこう。(1996,8,7調)

○ チェン・マイ大学 Chiang Mai University

チェン・マイ県のチェン・マイ市は、タイ北部最大の都市で、もと、北部タイの部族国家を統合したタイ・ユアン族のマンライ王によって1296年に建設されたラーナー・タイ Lanna Thai 王国の王都であった。この王国は、タイ中部のシャム族、東北部のラオ族などに拮抗する独自の文化を誇ったが、20世紀初頭、シャムに併合された。

チェン・マイ大学は、ラーナー・タイ文化の継承、保存、研究のメッカとなっているところである。旧市街のターペー門辺りから、バスでもミニバス(乗合)でも正門まで15分程度である。しかし、何分にも広大な丘陵を抱えたキャンパスである。一旦、方途を失うと時間のロスも大きい。

チェン・マイ大学図書館の貴重書保管庫には、ラーナー・タイ語を中心とする言語によって書かれたバイ・ラーン(及び、サムット・コーイ紙等)による典籍・文書が多数所蔵されている。それらの内容・性格につき、同館作成の刷り物(タイプで打ったものの複写)によれば、次のような「目次」(及び、点数)となっている。複写を繰り返したものらしく、印字が不鮮明で読みにくい。今、タイ文字・タイ語を私に訳す。Romanize する場合の綴り字の方式は、松山納著『タイ語辞典』(平成6年10月、大学書林)のそれによる。ページ数は省略する。

内容・性格	点数	
1: 僧の規律/規則, Discipline	8	保管庫の1・2 (奥の左手): 貝葉本 [図版D]
2: 仏教の経・経蔵 (三蔵の一)・Sutra, スウト sùut	43	同3 (その右側): 黒いコーイ紙の折り本
3: 仏教の論 (三蔵の一), アピタム ꜱaphítam	20	同4 (その右側): 黒いコーイ紙の折り本, 紙本文
4: バーリ語 Baalii (バーリ語<中期インド語, 上座部仏教語>) で書かれた経典・経文・カムピー khamphii	*	書, 貝葉本 (一部, 新・旧, 印刷本)
5: 祈りの言葉	12	ヤシの葉による貝葉本には, 大判の写本, '中判・小判
6: 仏教の功德, アニソン ꜱaanísǒŋ	24	の写本, 数百葉の大冊から数葉の小品, 書帙や表紙のあるもの・ないもの, 板表紙や小口に金や朱の塗料を塗ったもの・塗らないもの, 装飾や模様を持つもの・持たないもの, など様々なものがある。[図版E]
7: 仏陀の昔の化身の物語	214	コーイ紙の写本は, 若干の差はあるものの (1センチ弱くらい), 大体, 縦横は同じである。[図版F]
8: 訓話・教戒, オーワート ꜱoowâat	11	これらの写本は, 原則として皆, 個別に, その形体に合わせて作った, 多くは細長い筒状の白い麻袋に入れている。細い紐で袋の口を絞り, 袋の余った部分は右巻きに巻き戻ってしまう。やや薄暗い部屋では, これ
9: 風俗・習俗・慣習, プラベニー-prapheeni/宗教儀式・典札・礼拝, ピテイ カムphítiiikam/威厳ある王室儀式・典札, プララーチャprarâatcha-phítii	38	が大きな白いカタツムリのように見える。これに書題を記した白いエフをぶら下げる。
10: 仏法・ダルマ, タムtham (thamma-)	78	ヤシの写本は, コリファヤシ, 即ち, トン・ラーンを用いた幅4~6センチ前後, 長さ30~50~60センチ前後のもの
11: 伝説・故事・物語, ニヤイníyaai	25	のである。尖筆に黒ススカ油をもって, 左から右へ4~10行で筆刻される。1穴本 (中央よりやや右寄りに穴を穿つ) もあるにはあるが, 2穴本が多い。2穴は,
12: 民間説話, ニターン・プーンバーン níthaan-phw̄wnbâan	12	@行儀よく対称的に中ほどに位置するもの (例えば, 左端から第1穴まで, また, 第2穴から右端までが各18センチ, 2穴間が17.3センチ) と, ⑤その位置より, それ
13: 仏教についての縁起・歴史・タムナーン tamnaan	34	ぞれ右寄りに穿たれたもの (例えば, 左端から第1穴までが22.7センチ, 第2穴から右端までが5.1センチ, 2穴間が26.3センチ) との二様がある。いずれにしても, 左
14: 仏陀の時代の諸国の王の歴史・年代記・タムナーン tamnaan	7	穴に紐 (0.3ミリ前後) を通す。厚い大冊になると, 紐では撓んでしまうので竹串を用いることがある。
15: (普通の) 法律 Laws / 規則 Rules	33	ヤシの写本には, また, 竹製の帙を有するものがある。
16: 語学文学の教科書・参考書・タムラー tamraa-ꜱâksǒn-rasâat	28	この帙は, 割り竹を写本の横長分 (左~右) に切り, 内肉をそいで薄くし, 4ミリ幅, 8ミリ幅, あるいは, 1.0
17: 詩作 níphon 詩を作る rǒoi-kroŋ/文学 wan-khadii	183	ミリ~1.5ミリ前後の幅に整え, これを細糸でスタレ状に編み込んだものである。麻布に縫い付けたものもある。
18: 占星術の教科書・タムラー tamraa-hǒoraasâat	26	すべて, 写本の形体に合わせて作成される。
19: 薬の教科書・タムラー tamraa-yaa	22	なお, ここでは見られないが, 貴重な仏典や祈禱書等
20: その他の教科書・タムラー	10	には写本櫃 Manuscripts Chest や書棚 Book Cabinet
21: 公務の記録 còt-hèet-râatchakaan / 個人の記録 còt-hèet-bùkkhn	33	が用意されることがあり, バイ・ラーン貝葉を披見するには専用の書見台 Kaakayia を用いることがある (アユ
22: 以上の他全部	84	タヤ, チャオ・サン・プラヤー国立博物館等に展示)。
23: (こまごました) 雑々 bèttalèt	114	ところで, チェン・マイ周辺, ランプーン Lamphuun
	1,059	(県), ランパーン Lampaan(県), パヤオ Phayau(県),

以下, 古写本のリスト, 寄贈者等の記述を略す。点数の総計は「1,059」となっている。これらの数字は, 実は手書きでメモされたもので, 数字が欠けている箇所もある。*部など, 所要のページ数からすれば10点ほどの点数が欲しところであるが (あるいは, その前後のいずれかに合算されたか), 今はそのままとした。

壁いっぱいには据えられた木製 (ガラス戸) の貴重書保管庫は4連から成り, それぞれは6棚から成る。

プレエー Phrêe(県), メーホンソン Mêchôŋsǒn(県) などの寺院には大量のヤシの写本が遺存しており, その

内の重要なものは、日本からの資金援助も行われてマイクロ・フィルム化されている。この間の事情については、岩本一恵氏執筆「タイ：ランナータイ古文書の調査と保存作業」(『トヨタ財団レポート』, NO45) に詳しい。

国立民族学博物館(吹田市)には、それらを和紙に複写印刷したものが所蔵されている。整理メモに、"Lanna palm leaf of manuscripts vol.1~30" とあるのがそれで、A3判(横)、計30巻(30冊)〈但し、内第25巻の1巻欠〉から成る。内訳は、第1巻~第11、第13~20巻、第22~24巻、第26巻、第30巻が Buddhism (Phutthasatana)、第12巻、第21巻、第27~29巻が Miscellaneous (雑々)となっている。もっとも、この30巻は全体の一部であり、全体を見るにはチェン・マイ大学の社会経済学研究室に行かねばならない。(1996,11,11調)

上記に関連し、以下の機関に触れておこう。

○ チュラロン・コーン大学 Chulalong Korn University (1997,4,3調)

バンコクのパヤタイ通り Phya Thai Rd. に位置する、ラーマ五世(チュラロン・コーン、在位1868-1910年)の名を冠し、1917年に創設された、タイ最古の国立総合大学である。王族との関わりも深く、多くの人材が官界上層部に進出している。

この大学の Centers of Academic Resourcesの貴重書室(6階、602/01室・02室)には、この国の、外国との政治・経済、思想・文化等の交流を物語る歴史的に貴重な古い洋書が多数保存されており、また、王室関係のバイ・ラーン(貝葉本)やコーイ紙等の典籍・文書が保存されている。バイ・ラーンでは、象牙板を埋め込んで文字を筆刻した特殊な写本、大型の宗教(仏教)写本(約200年前、クメール語)、中型のランナー・タイの宗教書などがある。中には、書物としての実体(文字を記したリーフ)を失って板表紙だけのものもあるが、これらについても、その装飾、模様、塗料・塗装等に相応の研究価値のあることを教えられた。[図版G]

なお、本館に所蔵されている貴重な参考書として次があるので、挙げておく。

① Ms. Kongkaew Weerapajak (ゴングケーウ・ヴィラープラチャグ著): *Kaantham Samutthai* (サムッド・タイの製造), <タイ語>, 仏暦2521年(西暦1978年), Royal Library(タイ), 書型26.0×18.9cm.

目次・前言4頁、本文25頁ほどの冊子で、サムッド・タイ、及び、バイ・ラーンの作り方について図版(白黒、8枚)を入れて解説したもの。全文タイ語。著者の肩書きは、バンコク国立図書館司書。

なお、サムッド・タイ、または、サムッド・コーイは、コーイ khōi というクワ科ムクバナオレボク *Streblus asper* Lour. の樹皮の繊維で作った大型の折り本である。紙の肌は黒く、これに白い文字、また、絵を書く。アユタヤ時代後期によく用いられたとされる。サムッド Samùt は書物、冊子の意。

② "Damphii balaan chabap laay nai samai rattan a koosin" (バンコク朝時代における重要なバイ・ラーン写本を探查する), <タイ語>, 仏暦2527年(西暦1984年), 書型18.3×13.0cm.

内題・前言等が4頁、本文46頁、本文中に図版(カラー)16枚とリスト等16頁を含む。小冊子ではあるが、詳細な解説書であり、図版も貴重である。

なお、関連して、タイ、カンボジアの碑文に関する次も所蔵されている。

③ George Coedès, "Collection de Textes et Documents Sur L'Indochine III." のシリーズの "Inscriptions du Cambodge vol. V., 1953年, vol. VI., 1954年, vol. VII., 1954年, 共に, Paris, 書型28.0×19.3cm.

セデスには、『カンボジア刻文集』"Inscriptions du Cambodge" 6巻(1937~54)の著書がある。共に、一帯のクメール民族・文化研究のための貴重な文献である。

○ コーン・ケーン大学 Khon Kaen University (1998,5,6調)

タイ東北部唯一の総合大学である。この芸術・文化センターには、様々な民俗資料に混じってバイ・ラーン写本、及び、コーイ紙の写本が50点前後展示されている。貝葉に関しては、57~63センチの大型本から、数葉のリーフがあり、また、色々な形態の板表紙、竹・布製の帙、袋帙まで多様である。けっこう古いものがあり、多くはクメール語 khmer (カンボジア語 Cambodian) が用いられている。[図版H]

この大学は、期せずして訪問させていただくことになったが、こうしてみると、タイの各地には、大小、このようなコレクションがあるということではなからうか。日本各地の国・公立、私立の図書館・資料館等には、古写本類はともかく、江戸期の版本くらいなら、大なり小なり保存されている。バイ・ラーンの伝存状況は、ちょうどそんな感じではあるまいか。

4 パルミラヤシについて

この第三次の調査ではコリファヤシ(トン・ラーン)の実状を調べるのが主たる課題であったが、思わぬ形で

パルミラヤシ (トン・ターン, または, トン・タール) の存在を確認することになった。即ち, タイの各地にはこのヤシが植えられており, その花序液が製糖, 酒, 薬などに利用され, また, 雌株の実が食用とされているのである。

(1) コーン・ケーンにて

コーン・ケーンの市街地から12号線を西に向かう。コーン・ケーン大学を右に見て, 空港へのバイパスをくぐり, 郊外に出る。途中の Nong Rua の右手20キロの Ubol Ratana Reservoir 付近からは古代の恐龍の化石が出ている。12号線は, だだ広い平野の中を, ほぼ真っ直ぐ西に伸びている。

そうした道路の端では, 時々, 物売りを見かけることがある。簡単な小屋掛けがあれば, 日傘一本の婦人もいる。車を止めるドライバーも, ままいるようである。

その一つに, 透明ビニールの小袋に入れた白いものを売っている婦人がいる。この, 白いものと見えたのが, パルミラヤシの実, 否, 正確には, その実の胚乳 (部) である。ちょうど, 日本のお正月の, 扁平状の丸餅のような形で, やや楕円形をしている。寸法は, 直径が横5センチ, 縦6センチ, 厚さ2センチである。これが, ビニールの小袋二つで (一袋に14~17枚入り) 15Baht だという。[図版I]

あたりを見れば, パルミラヤシは, 時々, 遠く近くの田畑や道の脇に, 一本, あるいは, 二三本, まれに8本ほども並木のように植えられて空に突き立っている。

パルミラヤシは, このコーン・ケーンではトン・タール Tòn Tarl といい, この白い胚乳をルク・タール Luk Tarl というときれる (Mr. Sontat Pahltab, Mrs. Pranee Pahltab, Ms. Ratchanee Nabklang談, 641 Watawuttaram 2, Ruenrom Rd. A. Muang, C. Khon Kaen, 40000, 在住)。ルク lûuk (luk) とは, (人間の) 子女, 息子・娘, (動物の) 仔, (植物の) 実・果実を意味するタイ語である。

パルミラヤシは, 3月頃に花を着け, この時節 (5, 6月), 大きな丸い実を房状に着ける。実は, 初めは青緑色だが, この頃, 全体的には黒くなり, 頭の小さな突起の周辺部だけが黄色い。房からもぎ取り, ヘタを外して計測すれば, 若干の大小はあるが, 尻から頭までの高さ (縦) が10センチくらい, 直径 (横) 9.5センチくらいである。バリ島の場合より小さ目である。

農夫らは, ナター丁を持ってこの高いヤシに登り, 房を切り落とし, 実をもぎ, それぞれの実 (殻) をえぐって中の胚乳をポロリと取り出す。この胚乳は, その実の青い時には水っぽい果汁そのものである。それが, だ

んだんと外側から固まっていき, 半透明のゼリー状 (プリン状) となる。最後の, 中心部の透き間も詰まる頃には, その外果皮は黒くなっているのので, 農夫は, これを目印にして採取する。[図版J]

胚乳は, 一個の実に, 大体, 3個入っているが, 2個のこともある。ゼリー状の胚乳は, 白い内皮に包まれたままの状態を取り出し, 売りに出す。この内皮は, 時間がたつにつれてひび割れてくる。食べる時は, ナイフ (場合によっては, 指の爪でも) で剥き取る。胚乳は, 瑞々しい, あっさりとした甘い味である。指がねとつくようなこともない。食後のデザート, あるいは, おやつ (間食) に向いている。後に, 町に帰った折, 気を付けてみると, 人通りの多いバスターミナルの隅などでも, これを売る婦人がいた。

実は, その後, 熟して来る。黒い外果皮の内側の繊維質は黄色く, 軟らかな果肉となり, 甘い強烈な匂いを発するようになる。胚乳もそのままの形で固く成熟する。爛熟した繊維質が崩れ出す頃, 胚乳は成熟し終わって, いわゆる, 種となる。落下するのは, この前後だが, 繊維質が黄色く熟れる時分には, 白い5ミリほどのウジ虫状の幼虫がたくさんめぐり込み, 固くなりかけた種 (胚乳) を食害してしまうことが多い。

パルミラヤシの雌株は, こうして実が着くから有益であり, 雄株の花序液からは薬 (利尿剤か) を作る, これらの幹は, 高くして固いのでボート等の材料となるとの説もあった (Mr. Sontat Pahlotab談)。[図版K]

パルミラヤシは, 雄雌共, その花序液から砂糖, また, 酒などを作ることでも有名であるが, 国によって, また, 同じくタイでも, 地域により, 時代によってその利用の方法が相違するようである。

(2) カンチャナブリーにて

パルミラヤシは, ここらでは Ton Tan というのだと, 先の Jou Putapon君は言う。

ちょっとした雑木林やココヤシの茂みの中に, また, イネやサトウキビなどの開けた田畑の真っ只中に, 一本, あるいは, 数本, といった状態で, その孤高の姿を遠望し, また, 仰ぎ見ることができる。散在的な植栽であり, まばらな存在である。TAT の職員は, カンチャナブリーから東方10キロのノン・カオ Nong Khao村に行けば, たくさん植えてあると言う。[図版L]

その tan につき, 松山納著『タイ語辞典』に, 次のように見える (タイ文字の見出し語を略す, 384頁)。

taan [名] 《植物》砂糖ヤシ, 扇シュロ

-tanòot (下略)

taanpannà? [名] 貝葉<文字を書写するシュロの葉>

前者のターン、ターン・タノードはパルミラヤシのことである。後者に見える-pannáṅ は、書物、書籍を意味する文語である(同書, 621頁)。これは、パーリ語の paṇṇa (葉、樹葉; 貝葉; 手紙を意味する、水野弘元著『パーリ語辞典』, 二訂版, 1970年11月, 春秋社, 166頁)からの借用語らしい。サンスクリット語では paṇṇa である(鈴木学術財団編『漢訳対照梵和大辞典』, 新装版, 1994年2月, 講談社, 762頁)。

パルミラヤシにつき、コーン・ケーンではタールといい、ここではタン(ターン)という。これは、方言の違いではなかろうか。コーン・ケーンは、東北タイ方言、ここは中部タイ方言に属する。中部タイ方言は、バンコクの言葉を基にした標準タイ語に最も近い。Jou 君のタン(ターン)も標準タイ語ターンに近い形である。

なお、その白い実 lūuk (胚乳)も、カンチャナブリーのバスターミナル近くの道端で目にすることができた。近郊の農家の婦人であろうか、二人でおしゃべりしながら、やはり、透明なビニールの小袋に詰めて売っていた。

(3) バンコク, その他

パルミラヤシは、実はバンコクの周辺でも目にすることができる。さすがに市街地は無理だが、地方に向かうバスに乗ると、その郊外に、殊に、西部や南部方面など、散在的に、まれには列をなして、聳えているのが見える。

[図版M]

タイでは、従って、北方、山岳部を除く、その大体のところこのヤシを目にすることができそうである。

なお、パルミラヤシが最も多く栽培されている地域の一つは、バンコクから 800キロほど南下したソングクラ Songkhla (県)のサトゥーンプラ半島 Sathing Phra だとされる(パルミラヤシ職業開発グループ執筆「パルミラヤシからの地域づくり」、『ヤシの実のアジア学』, 1996年11月, コモンズ, 242頁)。ここでは、主にその花序液からヤシ砂糖を作っている。

おわりに

タイのバイ・ラーン Palm Leaf Manuscripts (貝葉)は、貴重な歴史資料であり、文化遺産である。我々は、常に、後世に残し伝える努力だけは怠ってはならない。消えることはあっても決して増えることはない。バンコクの Talat Chatuchak 市場、また、北部のメー・サイ、チェン・マイなどからはその流出も見られる。主にミャンマー系のものであり、データのないままの骨董品でしかないが、再生産や復刻・複製の不可能であることを思えば、痛ましいことである。

バイ・ラーンの素材であるコリファヤシ、即ち、トン・ラーンの植栽地は、確実に、かつ、急速に減少しつつある。保護の手を休めてはならず、また、バイ・ラーンの製作・筆刻の方法についても、これを国家的伝統芸芸として保持・確保しておく必要がある。

パルミラヤシ、即ち、トン・ターン(タール)も、その利用方法、利用度は減ってきているのではなかろうか。製糖産業で採算がとれるならよいが、そうでない場合は、植栽されない方向へ向かうであろう。日常的に、その実を食べ、葉や幹を身の生活に役立てるのは、いつまでのことであろうか。

ところで、タイにおけるこのパルミラヤシにつき、気になることがある。

先に、「貝葉<文字を書写するシュロの葉>」を意味する「ターン・パンナ taan-pannáṅ」というタイ語に触れた。このパンナが書物、書籍、貝葉本を意味するとすれば、ターン taan、即ち、パルミラヤシ(の葉)もその素材とされていたのではないかと疑われるのである。

南インドでもバリ島、ロンボク島でも、書物・貝葉本の作成にパルミラヤシを用いたのだから、その素材とされることは可能だが、事実はどうであったろうか。スリランカのように、かつてはコリファヤシ、パルミラヤシが両用され、前者は経典など上質の書物に用いられ、後者はその他に用いられたということであろうか。

タイ語の語彙は、その約三分の二が外来語である。殊に、パーリ語・サンスクリット語の影響が大きい。今の pannáṅ も、別に「写本; 書籍, 書巻; 経書, 経典; 抄写用の貝葉 (bailaan)」などを意味する Pòothakàṅ も、外来語である。言葉がものに即しないで、言葉だけで行き来する蓋然性もあるので問題が複雑になってくる。なお、考えてみなければならない。

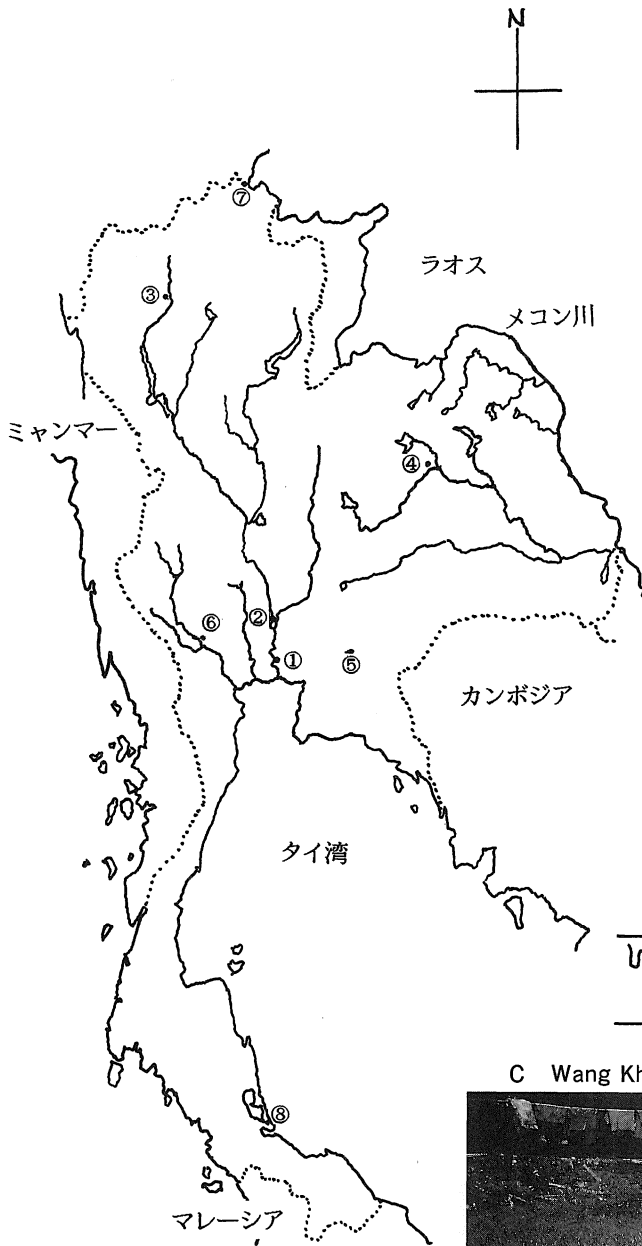
パルミラヤシはアフリカ原産といわれ、これがインドに入って書記素材とされたのは、比較的近代になって、(16世紀末~)17世紀初~19世紀初頭(東部インド地方)のことであるとする説がある。A.F.Rudolf Hoernle の "An Epigraphical Note on Palm-leaf, Paper and Birch-bark", *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, LX IV, Pt. I, NO.2, 1900, P. 122, P. 124)の所説がそれで、それまでのインドの仏典、その他はコリファヤシに写されたとされる。重厚な調査・研究に基づく所説である。とすれば、それより東側の諸国・地域もこれに倣うことになろう。しかし、仏典や仏書音義などの記述を分析すれば、中国唐代以前、インドには、既に、パルミラヤシが存在していたように見受けられる。3世紀の仏典 Lalita Vistra (仏説普曜經)に見える "Tala-

phalasya”もパルミラヤシの果実をいうのであろう。更に、Mr.V.Ganesan (Institute of Asian Studies) からは、紀元前2世紀の文献の、”Paripatal” やタミル語文法書 Tamil grammatical text ”Tolkkappiam” に、この Palmyraヤシの木とその言葉 Panai (タミル語) についての記載・言及がある、との教示を得た。

パルミラヤシは、もし、それがアフリカ原産であるとしても、紀元前はかなり古くから南アジア・東南アジア一帯に広まっていたように推測される。文字との出会い、書記素材としての利用方法についても、その上にたって考えていかねばならない。 (Sept.3,1998)

【付記】

本稿は、平成10年度前期、大学院修士課程における国語学特論の講義ノートの一部を抄出したものである。参考文献、注記、また、フィールド・ワークに際して協力していただいた方々など、付言すべきことは多いが、今は割愛させていただく。



A タイ略図



B Donglarn N.P. の自生のコリアヤシ

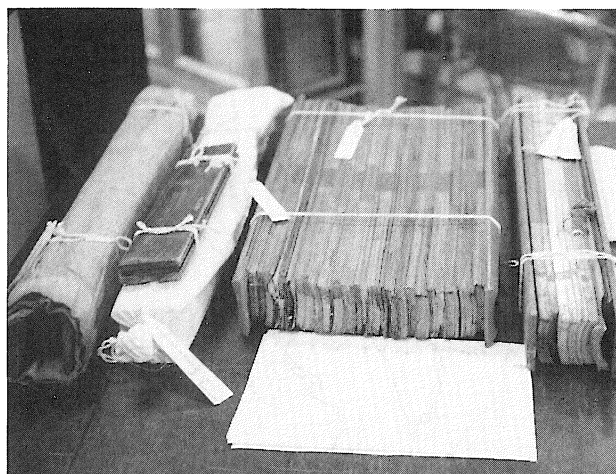
- ①バンコク
- ②アユタヤ
- ③チェンマイ
- ④コーン・ケーン
- ⑤カンチャナブリー
- ⑥カビンブリー
- ⑦メーサイ
- ⑧ソンクラ

C Wang Khon Daeng 村 陽に晒すコリアヤシの幼葉

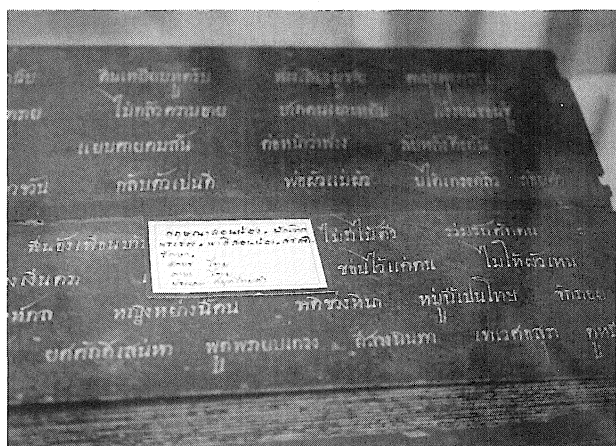




D Chiang Mai Univ. 貴重書保管庫 (2)



E Chiang Mai Univ. 貝葉本



F Chiang Mai Univ. コーイ紙折り本



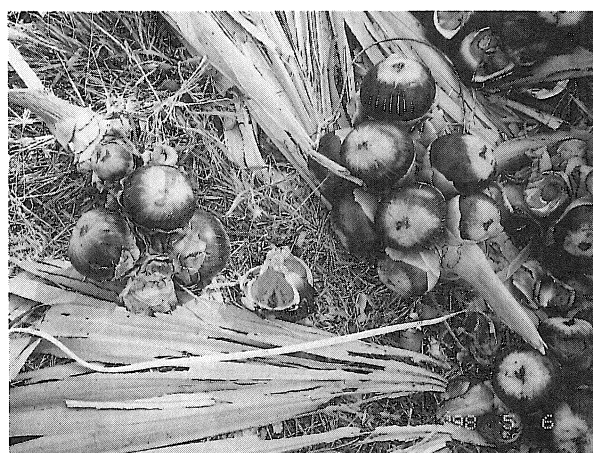
G Chulalong Korn Univ. 特殊貝葉本



H Khon Kaen Univ. 貝葉本



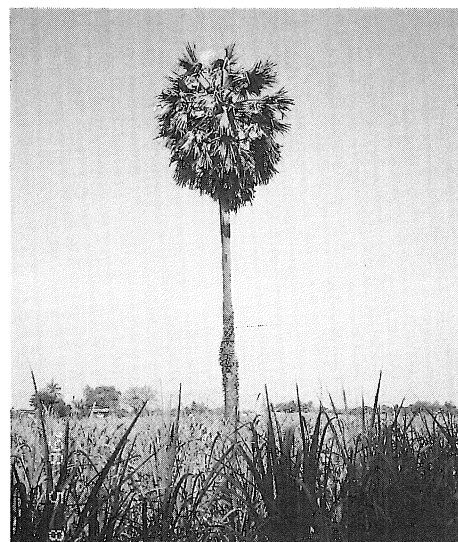
I Khon Kaen 郊外 Palmyra Palmの実の胚乳



J Khon Kaen 郊外 Palmyra Palmの房状の実



K Khon Kaen 郊外 Palmyra Palmの雄花



L Kanchanaburi郊外 Palmyra Palm



M Bangkok 郊外 Palmyra Palm